

まんだら通信

第218号 (通巻253号)

平成26年08月 西暦2014年 佛暦2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

焼き場に立つ少年

焼き場に一〇歳くらいの少年がやっていた。小さな体はやせ細り、ぼろぼろの服を着てはだしだった。少年の背中には、二歳にもならない幼い男の子がくくりつけられていた。その子はまるで眠っているように見えたところ体のどこにも火傷の跡は見当たらない。

少年は焼き場のふちまで進むとそこで立ち止まる。わき上がる熱風にも動じない。係員は背中の幼児を下ろし、足元の燃えさがる火の上に乗せた。まもなく、脂の焼ける音がジュウと私の耳にも届く。炎は勢いよく燃え上がり、立ちつくす少年の顔を赤く染めた。気落ちしたかのように背が丸くなった少年はまたすぐに背筋を伸ばす。私は彼から目をそらすことができなかつた。少年は気を付けの姿勢で、じつと前を見つづけた。一度も焼かれる弟に目を落とすことはない。軍人も顔負けの見事な直立不動の姿勢で彼は弟を見送つたのだ。



をかけることもできないまま、ただもう一度シャツを切った。急に彼は回れ右をすると、背筋をぴんと張り、まっすぐ前を見て歩み去った。一度もうしろうを振り向かないまま。

係員によると、少年の弟は夜の間に死んでしまったのだという。その日の夕方、家にもどってズボンをぬぐと、まるで妖気が立ち登るように、死臭があたりをただよった。

今日一日見た人々のことを思うと胸が痛んだ。あの少年はどこへ行き、どうして生きて行くのだろうか？

アメリカ海兵隊の軍曹ジョー・オグネルさんは、軍命令で、敗戦直後の長崎などの様子を写真に撮りました。公式の写真の他にご自分のカメラで写したものは、余りのむごたらしい映像のため、別のトラックに長い間封印したままでしたが、決心して開き、『トラックの中のニッポン』という写真集として公開した中の一枚が上の写真です。

六年前、平成二十年二月の百四十号にも一度取り上げましたから、憶えておいでの方も多いことと思います。

あの時、不可侵条約を破って攻め込んできたソ連軍に、満州の辺境で両親と妹を殺された私は、この同じ年くらいの少年のことが頭から離れないのです。家族の中でただ一人生き残ったこの少年は、多分、ご近所の大人が背負わせてくれた弟さんを火葬するために、ここに来ました。

直立不動のこの少年にとって、背中の弟さんの厳粛な葬式の総てが、この場所だったのです。一瞬で家族を失った悲しみ、戦争に負けた悔しき、その他諸々の思いを噛みしめながら、必死に「気をつけ」の姿勢を崩さずにいた。今の我々には想像できないことですが、私にはそのように見えます。因みに、この時はまだ占領軍による『日本人の骨抜き作戦』は始まっていません。

アメリカは、家族やお国のために、正しいと思った時は命を投げ出しも後悔しない、という日本人の精神の強さを、あの戦争でイヤというほど思い知らされました。

沖縄では、食料も不足している中で、進んで軍のために食料を提供し、男はすべて戦場に赴き、残った女性は率先して炊事婦や看護婦、砲弾はこ

び、斬り込み隊などに志願し、軍隊とともに戦いました。

だから、沖縄司令官の太田実さんは、自決の前に沖縄県民の敢闘を讃え「沖縄県民斯克戦えり、県民に對し後日特別のご高配を賜らんことを」と、東京の海軍次官に打電しています。

特攻の人たちも、国を守るために尊い命を捧げました。ですから、「軍に強いられて、戦わされた」という考え方は、命を捨てて戦った人たちへの侮辱というべきでしょう。

進駐軍の洗脳作戦は「私たちアメリカは、あなた方日本人に民主主義を伝え、平和をもたらすために来ました。皆さんは無能な指導者のお陰で、ひどい目に遭ったのですよ」というものです。

彼らは極秘に、放送局と出版社、新聞社に命令して一字一句に至るまで徹底的な検閲をしました。個人の手紙も開封して調べました。そして、細心の注意を払って検閲の跡を残しませんでしたから、国民の目から見れば、放送や新聞記事が真実に見えます。

「日本は悪者だった」というこの考え方を、世界は歯がゆい思いで見つめています。

テキサスに住む普通のアメリカ人「テキサス親父」が、インターネットで日本応援を続けています。

アジアの哲人といわれる、マレーシアの元首首相ハティールさんは「立ち上がれ日本人」で「アメリカに盲従するな、中国に怯えるな、自らの国に誇りを持って」と激励しています。台湾の李登輝元総統はこのほど「李登輝より日本へ贈る言葉」という大作をわざわざ発表して、日本人の目覚めを促しています。

にっぽん人情小噺 落語家 三遊亭鳳豊 第一〇三話 私の本

いま、認知症のおじいちゃん、おばあちゃんが大変なことになっていますね。

先日の新聞では、六十五歳以上のうち、認知症の人は推計十五パーセントで、二〇一二年の段階で、約四百六十二万人にのぼるそうですよ。認知症の方がこれだけいらつしやるということは、認知症の方があるご家族はどれだけおられるんでしょうか。

私も仲間と話しますけど、「うちのおふくろは亡くなったけど、最後までボケなかつたよ。感謝してるよ」などという人も多くて、いまや、認知症にな

らないことが勲章のようなものだそうですね。また、今年、こんなことがありましたよ。

認知症で徘徊中の九十一歳のおじいちゃんが鉄道の線路に迷い込んで、電車にはねられて亡くなったという事故で、裁判所が遺族に鉄道会社に賠償金を払うように命じたんですよ。これ、ちょっとひどくないですか？ 介護者が見失ったという事実はあるんですけど、だからと言って、その責任まで責めるといいうのもねえ。

それから、最近、問題になっているのは、認知症の行方不明者ですね。警察庁によると、家族から届け出た認知症の行方不明者は、昨年だけで一万三千二百二人で、前の年よりも七百人以上増えたそうですよ。それでも、ほとんどの方は一週間以内で所在がわかったそうですが、昨年、一昨年の届けのうち、いまも二百五十八人の方の行方が不明なのだそうです。なんでも、そういう方は、身元不明なまま介護施設で長年暮らしているというのですから、家族は探さないとすかねえ。

今日は、そんな認知症のあるおばあちゃんのお話です。

いま、お年寄りに昔話を聞いて、それをその人の「話し言葉」で書いて、手作りの本にして、その方に差し上げる「聞き書き」という運動が福祉ボランティアの間ではやっているそうなんです。

どう行われるかといいますとね、施設で「昔話を話したい」と思っていらつしやるお年寄りを紹介していただくいて、もちろん、ご家族の了解をもらって、聞き書きボランティアが施設を訪問して、そのお年寄りからお話をうかがうのです。

「おばあちゃん、かけっこ早かった？」「え、あたしはい？ 早かったよ、女の子じゃ一番だった」「へえ、そうなんだ。運動靴はいて走つたの？」「はだしじゃよ、はだし」

などと会話が弾むと、それをおばあちゃんの独り言のようにボランティアはこう書いてあげるんですね。「ああ、運動会か。あたしはね、かけっこ早かったもんじゃ。クラスの女の子のなかじゃいつも一番じゃった。え、運動靴？ はだしじゃよ。靴なんかはかねえだよ」

こんな感じで書くから、本になると、おばあちゃん

